

「農学国際協力」vol.13を発刊します

学術雑誌「農学国際協力」は、農学を武器に国際協力分野に身を投じようという人材を育成していくためのプラットフォームの役割を目指しています。このため、本誌では農学的視点から世界の実像を理解するための論文や農学研究の国際的展開の可能性を示す論文、先進的研究の成果を世界的な問題の解決のために用いたケースレポートなど、意欲的な原稿を集めて掲載していきます。Vol.13号では、ケニアやタンザニア、ミャンマー、バングラデシュでの実践的な研究論文を掲載するとともに、東南アジア文部大臣機関農業高等教育研究地域センター・大学院教育機構（SEARCA）開発部長のEditha C. Cedicol博士に、国際農学研究の舞台で活躍する上での日本人若手研究者へのメッセージを寄稿して頂きました。また、東京大学大学院教育学研究科の北村友人准教授には、途上国における能力開発と教育の役割について様々な観点からまとめて頂いています。加えて、北海道大学、東京大学、茨城大学、東海大学、鹿児島大学における農学分野の先駆的な海外研修についても紹介して頂きました。本誌が皆様の国際協力活動のお役に立てれば望外の喜びです。（犬飼義明）

名古屋大学アジアン・サテライト・キャンパス:カンボジアキャンパス開所式

10月13日に、プノンペン市内にあるカンボジア日本人材開発センター（CJCC）において、名古屋大学カンボジアサテライトキャンパスの開所式が行われました。名古屋大学からは、鮎京副総長をはじめとする関係職員が、またカンボジアからは、同国省庁関係者や在カンボジア王国日本大使、JICAカンボジア事務所所長をはじめとする多くの関係者が出席しました。カンボジアキャンパスでは、農学・法学・国際開発学の3分野を対象とし、それぞれ王立農業大学、王立法経大学、王立プノンペン大学との連携にて博士課程（後期過程）の教育を行います。第1期生には、農林水産省から2名、環境省から1名が選抜され、開所式では国際開発学を専攻する環境省勤務の学生が「このキャンパスにて知識を習得し、カンボジアの国際的な地位向上に貢献したい」と豊富を述べました。

同日の夕刻には、プノンペンホテルにおいて名古屋大学同窓会が開催され、100名を超えるカンボジア人の名古屋大学卒業生が集い、カンボジアキャンパスの開講を祝いました。また開所式の翌日には、名古屋大学の教職員およびカンボジア政府機関の職員が王立農業大学を訪問し、同大学が農学国際教育協力研究センター（ICCAE）と共同実施しているJICA草の根技術協力事業や科学研究費補助金を通じた伝統的米蒸留酒や食品加工に関する研究の現場、生命農学研究科との連携で開始した乳牛生産を通じた各種実習と生乳生産を目指すプロジェクトの現場等を視察しました。この視察は、ICCAEが積み重ねてきた実践を通じた現地の人材育成の実情や、カンボジアの教育事情について広く知って頂く良い機会となりました。（伊藤香純）



日本側出席者：左から磯田アジアサテライト学院長、鮎京名大理事、隈丸特命全権大使
カンボジア出席者：右から
H.E. Dr. LUY Channa, rector of Royal University of Law and Economics
H.E. Dr. CHET Chealy, rector of Royal University of Phnom Penh
H.E. Mr. Chin Malin, under secretary of state at Ministry of Justice
H.E. Dr. Ngo Bunthan, rector of Royal University of Agriculture
H.E. Hor Malin, Secretary of state at Ministry of Agriculture, forestry and fisheries
H.E. Dr. HANG Chuon Naron, Minister of Ministry of Education, Youth and Sport